

京都市文化観光資源保護財団

会報

No. 28



もくじ

シリーズまもる㉙ 雜感 (財)京都古文化保存協会理事長 西芳寺貫主	藤田 价浩	P 4	
古い寺に住んで(5)	円徳院住職	後藤 正元	P 6
「文化財紹介」 吉田神社	吉田神社宮司	大爺 恒夫	P 7
古代政治と仏教－2－	作家	松本 清張	P 8
京都の文化的伝統とこれからの町づくり(3)	京都大学教授	西川 幸治	P 12
			P 13
会員だより			P 14
保護財団の活動			

会報題字 理事長佐伯 勇

会報	
No. 28	56. 1. 1
編集・発行	
財団	京都市文化観光資源保護財団
法人	京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
	〒606 電話 075-752-0235(代)



賀 春

財団法人京都市文化観光資源保護財団

理事長 佐伯 実

新しい年の始めに皆様方の御健勝と御多幸を心からお祈り申し上げます。

旧年中は、皆様方の暖かい御支援、御協力を賜わり厚くお礼申し上げます。

さて、著しく近代化の進む私達の社会生活の中で、平安遷都以来、千二百年の歴史の中で受け継がれてきた京都の歴史的文化遺産である文化観光財や昨年、特に論議を呼んだ祇園祭・大文字五山送り火行事をはじめとする伝統行事等の保存、継承について多難な時期を迎えていた今日、これら京都の文化遺産を後世に保存継承するべく設立されました当財団にとりましても本年は、新たな飛躍を望まれる年でございます。

日本人の心のふるさととして、京都市民は

**募金にご協力いただき
ありがとうございました**

寄付者芳名録(敬称略)55.8.1~55.10.30

—法人及び団体の部—

〔特別会員〕

※財団法人 不審庵 <320万円>

〔普通会員〕

※要建設株式会社 <21万円>

※山勝織物株式会社 <17万円>

※株式会社 灰孝本店 <16万円>

※京都府中小観光旅館部会 <13万円>

※株式会社 柴増 <12万5千円>

※株式会社 八千代 <11万円>

〔贊助員〕

※株式会社 阪ノ下商店 <5万5千円>

※株式会社 曽根商店 <4万3千円>

※ヤマカワ株式会社 <2万6千円>

※株式会社 井上工務店 <2万3千円>

※株式会社 京都相互銀行秘書課 <2万円>

学校法人立命館会計課 <2万円>

※株式会社 富士銀行京都支店 <1万5千円>

京都料理組合 <1万円>

東洋信託銀行株式会社京都支店 <5千円>

木村屋製パン <2千円>

—個人の部—

〔特別会員〕

※福井 忠明 <14万4千円>

※竹村 実 <12万5千円>

※北野山人 <11万円>

〔普通会員〕

※親谷 貞己 <9万円>

※梅岡 大祐 <8万3千円>

※杉嶋 光子 <7万円>

※竹内孫兵衛 <7万円>

※丸山末棹 <6万8千5百円>

※中島次郎 <6万円>

※水口英子 <6万円>

※渡辺幸子 <6万円>

※三原慶三郎 <5万7千円>

※大橋経治郎 <5万6千円>

※岡本保止 <4万9千9百9拾9円>

※上野直蔵 <4万円>

※谷口祐三 <4万円>

※畠中惟三子 <4万円>

※村田陶苑 <4万円>

※山田岳行 <4万円>

※高橋一男 <3万9千円>

※本田善一郎 <3万5千円>

※能登孝成 <3万5千円>

※竹内キミ子 <3万3百円>

※内田和正 <3万円>

※加藤雅一 <3万円>

※今井憲一 <2万3千円>

※別所とみゑ <2万3千円>

※吉田篤信 <2万3千円>

※西村弥五郎 <2万1千6百円>

※友田弘治 <2万円>

※津田誠一郎 <2万円>

※平沢興 <2万円>

〔賛助員〕

※井田喜智郎 <1万8千円>

※入山敦子 <1万8千円>

※松本善次郎 <1万6千円>

※鈴木光子 <1万5千2百円>

※山田省曹 <1万5千円>

※平野萬吉 <1万4千円>

※池田詰一 <1万4千円>

※前田ふみ <1万3千円>

※奥崎一郎 <1万3千円>

※伊藤重和 <1万2千円>

※田村彰敏 <1万2千円>

※アオイ自動車従業員一同 <1万1千3百9拾6円>

※佐藤喜一郎 <1万1千円>

※今井二郎 <1万1千円>

※西原寿子 <1万円>

※原満寿子 <1万円>
 ※小笠原俊之 <1万円>
 ※駒井桂之助 <1万円>
 ※田中克子 <9千2百円>
 ※木原滋 <9千円>
 ※清水洋介 <8千5百円>
 ※元吉正文 <8千円>
 黒崎永子 <7千8百3拾7円>
 ※堀菊枝 <7千5百円>
 ※西井貞子 <7千5百円>
 ※閏崎みのり <7千3百円>
 ※薬師寺ハナ子 <7千円>
 ※大野健三 <7千円>
 ※矢野芳子 <6千5百円>
 ※西田健一 <6千円>
 ※由利松治 <5千2百円>
 ※由利多石崎 <5千2百円>
 小田嶋綾子 <5千円>
 三宮敏彦 <5千円>
 ※北村登喜子 <4千2百円>
 ※藤本忠利 <4千円>
 平井治子 <4千円>
 松田良雄 <4千円>
 平野和彦 <4千円>
 岩井種一 <3千円>
 遠藤伊之助 <3千円>
 小川幸次 <3千円>
 東森昇一郎 <3千円>
 谷美千代 <3千円>
 田淵康雄 <3千円>
 澤村彰 <2千7百円>
 上田信三 <2千2百円>
 足立カネ子 <2千円>
 東森治世 <2千円>
 篠原政枝 <2千円>
 寺田智恵子 <2千円>
 中山正子 <2千円>
 根尾靖子 <2千円>
 水島幸子 <2千円>
 佐村伸一 <1千円>
 堀照子 <1千円>
 都築元昭 <1千円>
 林寛子 <1千円>
 河田美知子 <1千円>

(※印は追加寄付の篤志者、寄付金額は累計額)

雑感

財団法人京都古文化保存協会理事長
西芳寺貫主 藤田 介 浩

昨夏は非常にすずしく、冷夏で農作物には被害が多かった季節であったが、その反面、寺の苔には好時節でもあった。

山門を閉ざして3年以上が過ぎた。寺をとりまく環境は、非常に変わった。今までの騒々しさから開放されて、静寂な50年以前の昔の姿をとりもどしつつあり、参拝者をして洗心の相を与えるようになった。

春には、かじかが鳴き、夏は源氏ぼたるが、飛びかうようになり、秋は赤トンボが頭上にとまり、もみじが紅葉して幽玄さを増す。四季こ



特別史跡名勝 西芳寺庭園

もごも変化する有様を手にとるようにして、味わうことが出来るようになった。苔庭の苔も日増しに美しさを加えている。

このように書いているとなんだか極楽浄土にいるようで自然になったように思われるがなんのなんのその裏方の苦しさや、苦労を味わってもらわなくてはならないだろう。今日も苔の中の雑草を一本一本丁寧にぬいて掃除をしている。昨年は雨が多かったせいかよく生えている。同じ場所を四回も五回もとっている有様、静かになつたせいか野犬や猫・鹿・猿・キツネ等がびこる様になり、その上、野鳥もずい分増えたが、苔庭に小水や便をして部分的に苔を枯らす。

又、冬になると、いのししが出て庭を堀りかえす。いのししは、夜行性であり毎夜子供連れで出るのでその被害が非常に大きい。年に二、三回の被害をこうむる。小鳥、鳩が巣を作り冬間の苔をついばむのも困ったものだ。

自衛手段を講じて
鉄条網をめぐらし
タン・網を張り、空
缶をつり下げ、防戦
是れつとめているが、
なかなか思うように
いかない。人間様だけの防災だけでなく、
獣の世界までに及ん
できてはたまらない。

2年前よりキツ
ネ親子が住みついて、
毎日毎夜一年中、庭
中を堀り虫けらを喰
って苔を枯らす。人

間の顔を見ても逃げようとしない。にくい様である。話によると、いのししやキツネ・猿・鹿等は全国的に増加している。狩人もよろこんで捕ってくれない。なんでも増えると公害になりそうだ。

文化財の防災は、建物には火災・盗難が大敵ですが美術工芸品は、火災や盗難、大気汚染、虫害などの災害から守り、安全に保存するために近年、鉄筋コンクリート耐火構造の保存施設の建設が進められている。

国宝や重要文化財は、永い年月にわたる先人の努力によって守り伝えられてきた貴重な文化遺産である。わが国の歴史と文化の正しい理解のために不可欠であると同時に、将来のよりよい日本文化形成の基礎となるものである。風雨にさらされて、老化した建造物や脆弱な美術工芸品は、みんなで細心の注意を払って後世に伝える必要がある。

文化財の保存、修理は、明治30年に制度化されて以来の歴史をもっていると言われている。

又、その技術は、世界に誇れるものである。木造建築は、約100年周期で解体、半解体等の根本的な修理が必要である。又、美術工芸品には、絵画・彫刻・工芸品・古文書・考古資料などさまざまなものがある。元来、材質が弱いと長い年月を経て風化し、材質が痛み、損傷の甚しいものが多い。文化財の修理は、長年の経験と



何気ない子供達の遊びの投石によって屋根瓦の破損が甚しい文化財。貴重な文化財を保存するためには子供の頃から文化財を大切にする心を養っていかねばならない。

高度の伝統的技術を身につけた技術者や技能者によって行われている。

このように、国宝や重要文化財の保存は並大抵のものではない。小学校、中学校時代に文化財を大切にする。又、愛する心構えをもっと養っていただき、国や府、県、市町村は保存に対して補助を十二分に増やしてもらい、所有者ももっとPRをして、先人が残した信仰と文化の遺産を安心して後世におくれるようお互に協力し合おう。



古い寺に住んで(5)

今回の“古い寺に住んで”は、文化財保護の観点から問題になっている土壙の落書きについて実際に被害を被っておられる東山・參寧坂から二年坂一帯にかけての散策コースにあり又、桃山時代の豪壮な特色を示す名勝庭園で有名な円徳院の後藤正元御住職に病氣療養中のところ御無理をお願いし、その実情をお聞かせいただきましたのでそのお話を掲載させていただきます。

一參寧坂、二年坂一帯は、特別保全修景地区としてその景観が守られており、円徳院もその環境の中に入っているわけですがそれにしても土壙の落書きは、ひどいですね。

●ちょうど、庭の築山にあたる部分が以前は竹やぶになっていて、その灌木がおい茂り道路上の壙がトタン壙のようなもので、場所がらあまり関心しないことから、昭和52年にこの場所にふさわしい壙をということで現在の土壙にしたのですが、実は工事にとりかかりまだ、上塗りがかわぬいうちにもう落書きがしてあるんですね。これには、さすがにびっくりしますね。最近、この附近を散策される観光客の方が多いのですが折角、京都にやって来てこの附近は、いわば京都の顔なのに皆さんがあの落書き

を見たらどう思われるか。新しく塗りかえても、たちまちのうちに又、落書きをしてしまう。かといって四六時中、見張っていることも出来ないし。いったい、どうしたら良いものか。本当に困ったことです。

一実際に落書きをしているところを見かけられたこともあると思うんですが。

●落書きをするのは若者がほとんどですね。しかし、若い人達でもあの落書きは誰でもけしからんと言う。じゃあ、何故落書きをするんだろうか。少なくとも私達、この国に生活している者ならみんな落書きが悪いということは、もちろんわかっているはずですよ。それが昼日中から人通りのはげしいところでどうどうと落書きをやっている。私には、そのへんの感覚がわからないんですよ。

一このような落書きを防止するには、物理的な対策はもちろん必要なわけですが根本的には文化財を大切にする意識の向上が必要だと思われるんですが。

●いちばん淋しく思ったのは、修学旅行生が土壙に落書きをしているのに引率している先生が知らん顔をして、見ていて何の注意もしない。その姿を見ましてね、つくづく学校教育の中で文化財の保護についてのモラルの教育が必要だと思いましたね。文化財を守るために、みんなが大切に守っていく気持ちを学校なり社会教育の中でもっともっと徹底させが必要なのではないでしょうか。

—京都の街には、いたるところに文化財があります。落書きをはじめ文化財を傷める行為を見かけたらつねに注意する心がけが必要ではないでしょうか。

「文化財紹介」

吉田神社

吉田神社
宮司 大爺恒夫

紅の花咲く緑の吉田山、遠く繩文土器と石器時代の遺蹟が発見されている。

太古の時代から既に人文の開けた蹟が窺われ、今もさながらに古代からの清浄の靈地であったのである。

桓武天皇が、平安京をこの地にはじめ給う時、この山は都の東北に位し、鬼門にあたるとして、比叡の山と共に王城の鎮護と崇められる地であった。吉田神社のこの地に創建される由来、また久しい

と思うのである。

平安奠都からおよ

そ65年、清和天皇の貞觀元年(859年)4月、藤原山蔭卿がこの清浄の地を選んで、藤原氏の氏神である大和の春日の神をここに勧請した。今より1,120余年にも及ぶ古であった。

伝えるところ、吉田の丘に鎮まり給う時、春日の神靈は、白鹿に召して渡御せられたという。現今、境内の一角に数頭の鹿を神鹿として飼育する所以である。

当神社創建以来 128年、一条天皇の永延元年(987年)より春秋二季朝廷により官祭が行われることになった。称して吉田祭という。爾來、

天皇、皇后、皇太后の行幸啓屢々で朝野の崇敬、殊のほか厚かったのである。

又、当神社には古くから社家吉田家があった。吉田神道の宗家として、その教義の原理により表現された斎場所大元宮(重要文化財)が、後土御門天皇の文明16年(1484年)山の中腹に祭られ、主として日本中心の思想を唱え、中世以来、我国思想界に寄与した功績は大きい。就中、江戸時代に及んでは、神道管領長上として、神祇信仰の上に絶大なる権威を保持したのである。

従って、吉田の地を踏まぬと神官になれぬ今まで、地方より資格取得に詣でる神職が後を絶たなかった。正に神道の中心地で、その町並みも加茂と共に特殊な社家町を形成していた。



—吉田神社節分祭—
桃弓で葦の矢を放ち疫鬼を追い払う行事 追儺式。

しかし、その古いたたずまいも僅か一部を除いて戦後次第に近代化され、昔日の繁栄を偲ぶべくもないでのある。

さて、最後に当神社の年中行事であるが、何といっても二月の節分詣に代表される。言うまでもなく、都の鬼門を護る吉田の神々に厄除開運を祈る市民の一年一度の伝統行事で、疫神祭、追儺式、火炉祭など京洛の春を告げる風物詩となっているのである。

芦の矢のふはりと飛びぬ追儺式(王城)

古代政治と仏教—2—

作家 松本清張

アレクサンドロスのヘレニズムに話をもどすと、私は仏教は中央アジアでヘレニズムを取り入れて出来たと思います。決して、インドのお釈迦様の始めた仏教、弟子どもが色々と語録を書いてそれが仏典になっているわけすけれどもそういうものではなく、そういう仏典じたいも中央アジアで出来たと思うのである。

その証拠に中国に始めて仏典を翻訳したのがやはり五胡十六国時代で翻訳者は皆んな胡人です。イラン人やトルコ系の人達でギリシア人の植民地の胡人あるいはペルシア人の植民地の人々であります。このようなことを見るならば、ますます仏教にはゾロアスター教的な要素があるのではないか。ゾロアスターというのは、イランでアケメネス王朝の頃から信じられた宗教でもとは、太陽信仰である。紀元前1000年かあるいは1500年と言われているゾロアスターという予言者がでてきまして、そういう土地の乱れた太陽信仰を整理し、理論し、体系づけてゾロアスター教というものが出来たわけです。このゾロアスター教というのは、一言でいうとやはり太陽信仰なのである。神様は、たった一つでアフラ＝マズダというのが最高神になっております。これは、太陽信仰でありますからどうしても光明を信じる。

ゾロアスター教というのは、簡単にいえば光明と暗黒の二元論からなっている。世界は、光明と暗黒の戦いであるというように決めている。



そして、光明が善であり暗黒は悪である。光明のアフラ＝マズダが絶対神であり、それに負けないぐらい力をもっている暗黒の神が、アングロ＝マイニュという名前ですが、これがずっと戦争をして結局、光明が勝つんだというふうに教えております。ゾロアスター教には「アヴェスター」という聖典がある。そのように光明というものを非常に最善としている。

これは、日本における聖武天皇の妻の光明皇后の光明というのは、私はこれからとったと思います。

そして、善と惡の戦いは光明と暗黒の戦いで象徴されている。そして、光明の象徴として火を崇拜致します。これは、夜は太陽がないからどうしても火で光明を象徴させなければいけない。のみならず、イランの風土は、砂漠地帯でありますから昼は暑いけれども夜になると急激に寒くなる。寒暖の差が非常に激しい。とても、

日本の風土では考えられない。

ゾロアスター教の成立は、このようなイランの風土を頭に入れないとわからないのです。暗黒が惡ということも暗黒があらゆる人間生活を制限し、そして病気の根源であるという考え方から暗黒を惡としたと思います。もっとも、インドの方にも「リグ＝ヴェーダ」という聖典がありアヴェスターのゾロアスター教とおおよそ似ている。部分的には違いますが、けれども兄弟関係にある。それというのが、イラン人もインド人もアーリア系であり、インド＝ヨーロッパ語族と言い、その起源はわかりませんが、恐らくソ連領のコーカサス地方、黒海とカスピ海の間の山岳地帯からおりてきて、その一つはイランに定着し、他はインドにおいてそこに定着したのではないかと言われている。

そうなれば、彼らのもつ宗教がうりふたつ、兄弟のように似ていることもわかるわけである。やはり、インドにもバラモン教ですけれども、リグ＝ヴェーダの中には、やはり暗黒と光明との戦いがあります。そのような宗教があってそれが西北インドから発生した仏教に大きく影響したというよりも混合したと私は思うのです。もともと、インドの仏教もお釈迦様が階級制度の厳しさそして不平等を不合理としてそして階級撤廃、人類平等ということを言い出していくからどこかヘレニズムと似ているわけです。インド仏教にないものを中央アジアの方で西の宗教を混ぜ入れたと考えられるわけです。

では、中央アジアのどこでそれが行なわれたであろうか。

紀元後2、3世紀にクシャーン王朝というのがインドの西北部のみならず、一帯に勢力を広

げて繁栄しました。

そして、始祖から3代目のカニシカ王というのが、これは非常に傑出した王様でそして仏教の信者であったわけです。では、そのカニシカ王だけが仏教を始めてひろめたかというとそうではなく、紀元前にマウリヤ王朝というインドの政権があって、アショカ王というのが仏教を信仰している。下地はあったわけです。それで、このマウリヤ王朝というのは結局、先に述べた北の大月氏國に滅ぼされてしまうのです。そして、その大月氏國のその大名というようなものの一つからクシャーン王朝が成立します。その三代目にカニシカ王が出てくるということなのです。そして、カニシカ王は、あつく仏教を信仰する。その領土であるアフガニスタンのあたりにいるギリシアの職人、やはりそのあたりは前から引き続いてギリシアの植民地的なものが残っていましたから、そういうギリシアの工人を使って初めてお釈迦様や菩薩の像をつくるわけです。

このカニシカ王のときに仏典の結集（けつじゅう）といって仏典の編集が行なわれます。おそらくこのときにインドの仏教とイランのゾロアスター教の要素とが混合されたと私は思います。それが胡人僧によって漢訳された仏典なのです。

だいたいインドでは、お釈迦様の肖像はあまり尊すぎて作られなかったのです。彫刻でもお釈迦様のいるところはお釈迦様を彫らないで法輪や仏跡石を彫ったり、樹木を彫ったりした。釈迦の説法をする場所として木蔭にあたる樹木の菩提樹などを彫る。そしてお釈迦様の座であるということを象徴し暗示するわけです。

ところが、ギリシア人というのは昔から何でも人間を彫刻にしないと承知しないのでありますからそれまでタブーとしたお釈迦様の像を彫ったのです。顔は、当然にギリシア的な顔になってくる。我々が、日頃京都なり奈良で拝んでいるような東洋的な仏様の顔ではなく、ギリシア彫刻とまったく同じ顔に彫られています。これが、ガンダーラ彫刻です。

更に、南の方にはマトウーラという所がありますが、そこでもやはり同時期にお釈迦様あるいは菩薩の彫刻が彫られている。但し、顔はガンダーラと違って非常にインド的ないわば民族的な顔になっています。ガンダーラが先かマトウーラが先かいまだ定説はありませんが、とにかく初めてお釈迦様のあるいは菩薩の像がこの時期に彫られるわけです。

その時に、お釈迦様の像だけかというとこれ又、経典に関係するのですが盧遮那仏というのがあり、これが中国でよく彫られた。この盧遮那仏は、奈良の大仏がそうです。これは密教では大日如来ともいう。大日如来というのは、太陽のことであり、盧遮那仏もそうです。

私は、盧遮那仏というのは非常にゾロアスター教的な影響があると思うのである。光明の象徴ですから。そして、中国に入ったときの仏様は、漢書などには金人と書いてありますが、金の人というのは、全身が恐らく金色に光っていた仏像ではないかと思われます。これが、後の金銅仏である。仏様が、金色に光る、あの金色は、ただきれいな為ではなく仏様の功德を金色に光らせて輝くという意味もありますが、それは後の意味で、最初は太陽の光を金色に現わしたというように私は考えます。

そして、盧遮那仏の光背というものは光線が出ている。あれは、みんな太陽の象徴であります。

それが、唐の時代には高宗の皇后に御存知の則天武后という男まさりの皇后がおり、そして高宗が死ぬとこの則天武后が自分で天子になる。この則天武后が又、ゾロアスター教というよりもマニ教ですね。マニ教というのは、ゾロアスター教と仏教とそれからキリスト教のいいところばかりを混合した、そういうイランで起った宗教ですが、そのマニ教の信者であったわけです。やはり、太陽信仰です。

唐の留学から帰った僧玄奘あるいは官僚の吉備真備などが則天武后的話を色々聞いて帰国して聖武天皇なり光明皇后なりに話したと思うのです。光明皇后というのは、光明子と書いてある。これは、読みようがないのです。もの名前は、安宿姫という。安宿姫から光明子になり、そして皇后になって後の諡号が光明皇后なのです。では光明子というのはいったいどう読むのか。得意の歴史学者もこればかりは、ふりがなをふっておりません。ふらないのはわからないからです。歴史学者というのは、わからないことは素通りするのです。私はわからないことはわからないで問題提起として出すべきだと思う。そうすると、もっと読者の関心を呼びそして向学の研究課題になると思いますけれども、どういうわけか自分の解釈のつかないところはさつと通り過ぎてしまうのです。

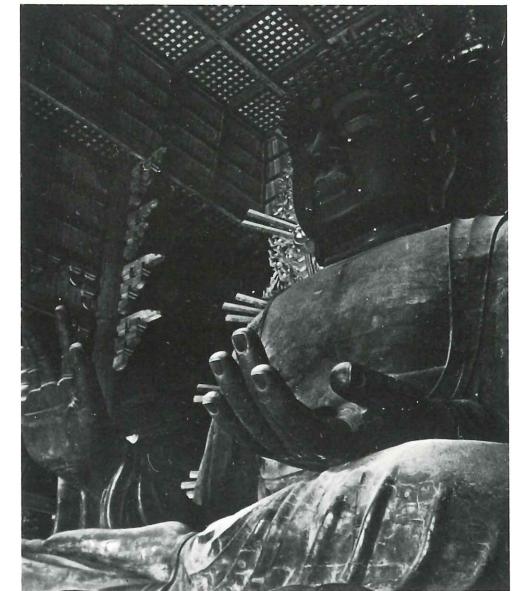
光明子というこの光明を名付けたのは、恐らく今述べた玄奘や吉備真備は、唐に18年程いましたので、この連中が帰って来てそして則天武後の話を光明皇后に話したことにより光明とい

う名前を付けたと思います。おそらく玄昉の進言でしょう。

であるから、聖武天皇あるいはその皇后が奈良の大仏、あの盧遮那仏の建立を発願するわけです。その発願も奈良でしたのではなく始めは、河内の知識寺で発願したと伝えられます。けれども具体的には甲賀の紫香楽にわざわざ遷都して大仏の試作をやっている。というのは、盧遮那仏をいきなり奈良につくったのでは失敗しますからテストをしたと思います。それが紫香楽宮で、一名甲可寺ともいいます。その前は聖武天皇は、恭仁宮をつくってそこにいた。

恭仁京、紫香楽京、難波京それから又平城京にもどっている。非常に聖武天皇は転々としている。何故転々としたか、歴史学者はこれまたわからないのです。恐らくノイローゼにかかっていたのであろうと言っております。果してノイローゼかどうかわかりませんけれども、要するに一代において非常に都を頻繁に変えている天皇です。その盧遮那仏の大きな像を造るのは、これは則天武后がそうしておりますから、大仏建立はその話を聞いた真似なのです。

則天武后は、どこに造ったのかというと当時は洛陽におきました。もちろん唐の都は長安ですが則天武后は長安にいられない。何故ならば、高宗の前の皇后の一派を殺しておりますからその怨霊がおそらく洛陽に引越したといわれていますがはたしてどうでしょうか。その洛陽で武后が可愛いがったのが、薛懷義という坊主です。これは本当の坊主ではなく、もとは洛陽の町を行商している薬屋なのです。それを呼びよせて、にわか坊主にしてしまった。その薛懷義のいう事を武后が聞いて大雲寺というマニ教



奈良 東大寺 大盧遮那仏像

の寺も造った。そして、大雲寺を全国の一州一カ寺に造れという触を出した。これを又、聖武天皇が真似をして全国に国分寺・国分尼寺をつくったのです。そして、その薛懷義のすすめによって武后は、洛陽の都の宮殿の中心に奈良の大仏の三倍以上もあるような大きな盧遮那仏の大像をつくったのです。それを薛懷義が自ら壊わしてしまった。何故、壊わしたかというと則天武後の愛情が、自分を離れて別の医者のところに移ってそれでやきもちをやいて馬で乗りつけて火をはなって焼いたのです。

そして、則天武后は更に洛陽の郊外の白司坂にやはり盧遮那仏の大像をつくろうとした。これは、財政その他の困難の為に出来なかったが、とにかくその大仏の真似を聖武天皇や光明皇后がしたのです。

(以下次回へ続く)

(財団設立10周年記念文化講演会における講演録)

京都の文化的伝統とこれからの町づくり(3)

京都大学教授 西川幸治

近世の京都

近世になると京都は、大きい危機にみまわれた。徳川政権によってその政治の中心が江戸に移ったのである。それまでも、福原の遷都があり、鎌倉政権のもとで鎌倉へ政治の中心が移ったことがあったが、京都は歴史を通じて政治的中心の地位を保ってきたのである。江戸幕府の開幕と一緒に京都は政治的中心の場を失った京都は伝統的な天皇の権威を中心として、政治的には静的な都市となったのである。

江戸時代は、京都の権威と江戸の権力との微妙な均衡とけん制の上になりたっていたのである。京都は伝統的権威とともに商業的中心という地位ももっており、それを守りぬくために京都は大きな努力をしている。

その一つは、慶長6年(1601)に築かれた高瀬川である。当時、秀吉によって天下の中心的な性格をもっていた伏見は城下町としての機能を失ったが、それを港町として再生させ、その港町と京都を結ぶ運河としてつくったのが角倉了以による高瀬川である。高瀬川によって淀川を通じて瀬戸内海と結ぶ流通の経路を確保することになり京都の商業的な地位の安定を計ろうとしたのである。

ここに京都は、権力の中心としての二条城の界隈に武家の家なみや所司代の屋敷があり、伝統的権威をもつ京都御所を中心に公家屋敷がならび、さらに東本願寺・西本願寺をはじめ本山と呼ばれる寺々とその周辺には門前町が、吉

田神社や上賀茂には今も残っている社家の町なみがならんでいた。その間を町人の町家がならぶという非常に文化性の豊かな多様な構成が、近世初頭にはつきりと現われてくるようになった。

しかし、近世の中期になると京都に大きな変化が現われてくる。それは、京都の経済をさえていた西陣の機業の変化である。それまで、京都の西陣は機業の独占権をもっていたが、享保ごろになるとその機業の技術が丹後の宮津地方にうつり、丹後ちりめんが生まれ、次に近江の浜ちりめんがうまれ、各地に機業がおこってくる。京都の西陣機業は独占権を失ない大きな変化をよぎなくされ、くわえて享保年間(1716~1736)には西陣の大火があるなどの悲劇をうける。

さらに、寛文年間(1661~1673)になると、それまで東北や北陸の物資は日本海を敦賀や小浜へ船で運び陸上げして、琵琶湖の塩津、今津海津まで運び、湖上運送で坂本や大津へ、更に陸路を京都へ運ぶというのが物資の運搬ルートであったが、河村瑞賢という土木請負師によって西廻り航路が開発される。これによって、日本海を西へ廻って下関から瀬戸内海に入り大阪に陸あげすることになり、商業的な中心は京都からいや応なしに大阪へ移り、以後大阪が「天下の台所」経済の中心として強い位置を占めることになる。

しかしながら、ここで京都市民は回復への強い意志をもって日本海と琵琶湖を結び琵琶湖と京都を結ぶ運河を度かさねて計画した。しかし、

江戸時代にはこの計画は実現しなかった。

近世中期から後期にかけてむしろ文化的な中枢として位置をかためお宮詣りやお寺詣りなどを含めて、各地の人々の関心をたかめてくる。
(財団設立10周年記念文化講演会)
(における講演録)(以下次回へ続く)

会員だより

文化財の保護は 先づ美化運動から

大槻敏夫(京都市中京区)

私は、カメラ道楽で自然美と古跡を訪ねることが多く、関心も深い。併し、再び得られない貴い宝が崩壊の度を早めつつあることに心を痛めている。

かつて欧米に1カ月の駆足の旅をしたが、何れの国も国家意識は強く、又古文化財の保存にも専念している。我国では戦後は自己中心の世相となり、愛国心云々すらも禁句の現実であり、自然の景観と文化財保護の熱意は一般に薄く嘆かわしいと思った。

日本の四季の千变万化の姿は実に素晴らしい。春夏秋冬の自然のふところに育まれた日本人、祖先が子孫に残された文化財、これらより受けられる力強い啓示が、敗戦直後の混乱に、自信喪失の日本人を焦土の中より立上らせて、今日の繁栄を招いた大きな素因となったのだと思う。勿

論、日本人の英智と勤勉の上になされたことは否定出来ない。

何故、日本中の人々が京都に関心を持つのか、何故、外国人が来日したら必ず京都を訪れるのか。それは千年の都であった京都が、物質文明では満たしてくれない心の空虚を癒してくれる心のふるさととしての要素を数多く持っているからである。自然のたたずまいと古文化財(有形無形)が、何れも「求めよさらば与えられん」の言葉のように、大きく叩けば大きく応えてくれるものがあるからだ。

戦後は核家族となり、マンションの規格化された住居のために休日になると屋外に開放されたい気分になり、自然の美や有名な古跡に足を

運ぶ人が多くなったが、歩きながら紙屑や空缶などをポイと平気で捨てることが多く、又ごみのない所を捜して腰をおろしたその人が同様に無用物を捨てて去って行く。美しい所を求めて来た人が、美しい所をごみの捨て場にする。この恥しい矛盾が平気で行な



—観光地に散乱するゴミ— 一人一人の小さな心掛けが しいては文化財の保護にもつながる。

われている。

人々の集まる所には商店がある。物を懸命に売るが、売った物が紙屑や空缶になって散乱していても清掃には関心の薄い商人も目立つ。美を求める人も、商人もお互に美しさと良さを破壊しあっている。愚しいことは常識以前の問題

ではあるまい。

私の住居が二条城の近くであるのを幸いに、早晩の城を一周する数ヶ月が続いた。その時、毎朝近隣の一市民の方が小道具を持って、紙屑や空缶を丹念に拾っていて下さる。その時の感激は今も忘れられない。「御苦勞様です。有難うございます」の言葉が自づと出て来た。恥しいことに私の早朝徒歩は中絶したが、おそらくあの市民の方は今も黙々として全く奉仕の精神でこの美化運動を続けて下さることだろう。

歩いていてもごみがあれば拾う。空缶が見つかれば必ず見えない場所へ置く。が余りにもごみが多くて捨て場に困る。観光客の多い二条城の周囲にしては塵埃函の数も少なく、そして小さい。大きなごみ箱を置いては風致を害すると当局者は考えておられるのかとも思う。無用物を捨てる所がなければ、そこは人間の浅はかさ、自分で処理することを止めてぽいと捨ててしまう。

自然の山は削りとられて痛々しい地肌を見せ、野や川は塵埃の捨て場となり、祖先の貴い遺産も落書きされ破損されたら我々の心のより所もなくなり世相は更に悪化するのではないかと案じられる。心の糧であるこの自然と文化財は金銭では求められぬ無限の富である。国民共有の財宝を護ることは我々の大きな義務である。美しい物、貴いものを見たら喜ぶと共に、おかげさまで、又有難うという合掌の気持ちを持つべきであるが、教育の欠陥で忘れられようとしている。有難いという気持ちは、物を大切にする心、又大切にせずにはおれない心なのである。

現実は、自覚を待つ悠長さは許されない。塵の散乱した中に美しい景色はあり得ない。又、

文化財の保護も求められない。文明国日本として誇り得る資格はない。先づ塵埃のない社会づくりの美化運動を提唱し、その実践を全国民運動に展開し、強制的計画的に継続しなくてはならない。空缶の処理については種々取沙汰されているが、一向に埒があかない。関係者の再考を促すと共に、行政上についても厳しい方針と実行を望みたい。

ごみを捨てない、ごみを拾う。各自のこの小さい実行が温かい人間関係、明るい職場、国土愛そして世界平和へと永遠に拡がって行くことを祈りたい。

保護財団の活動

京都の文化遺産は、いま大きな曲りかどをむかえております。千年をこえる歴史の中でそれぞれの時代の移り変わりとともに守られ、現代に伝えられてきた文化遺産それは日本の顔でもあります。しかし、近年の社会的経済的環境の急変は、これら文化遺産の保存と維持について様々な大きな問題を生んでおります。

■文化財の現状

文化財の維持管理は、文化財を保有する所有者又は管理者が行なうことになっていますが、しかし、現在、京都市内には2000の社寺を中心と計り知れない程の文化財があります。

こうした文化財は、長い歴史をもつだけにその修理も年々ふえ又、その修理経費も物価急騰により年々莫大なものとなり、修理も出来ず放置されているものや価値を著しく損なう修理がなされているものもあるなど憂うべき状況にあります。

■四大行事の維持

京都の長い歴史と時代の変遷の中で伝えられてきた四大行事は、それぞれ由緒の深さと歴史を織り込んだ日本の伝統行事です。

しかし、近年の社会事情の変遷は人手不足や諸経費の高騰等を招き、その保存や執行の面で大きな支障をきたしています。この様な中で昨年は祇園祭、大文字五山送り火行事の執行問題が論議をよびました。

■年中行事と郷土芸能の保存

京都には、四大行事の他に四季を彩る素朴な年中行事や由緒ある郷土芸能もそれぞれに歴史と伝統に培われ今日に伝えられています。しかし、これらの保存執行は地元の方々の努力と

情熱により支えられていますが、後継者不足や財政的欠乏は深刻でその保存継承が危ぶまれています。

■文化財を災害から守る

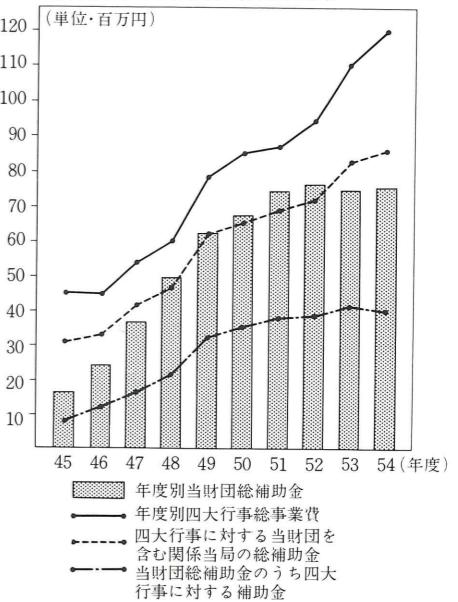
まだ記憶に新しい平安神宮や城南宮の火災は、私達に大きな衝撃を与えました。火災は、何百年の歴史的文化遺産を一瞬にして灰にしてしまいます。放火や火遊びによる火災から文化財を守るために防火施設の普及を徹底しなければなりません。

皆様のまわりの方々の中で京都市内に在住されておられ新しく当財団へご協力いただけます方は、京都市内各区役所・銀行・信用金庫の窓口に納付書を備えてありますのでご利用下さい。

京のよさをいつまでも守るために 皆様の新たなご協力をお願いします

“この募金へのご協力をあなたの方々にも呼びかけて下さい”

（参考）
過去10年間における当財団の補助金交付実績と
四大行事にみる事業費と補助金の推移



けれども、皆様方から積極的な御協力をいただいているにもかかわらず現在の基金では、この状況に対応出来ず再度、皆様にお一層の当財団の募金へのご協力をお願い申し上げる次第でございます。

京の伝統行事・芸能記録映画の紹介

京の伝統行事・芸能を広く一般の方々に理解していただき又、永く後世に継承する為に京都市では、現在文化財の記録映画を制作しております。これらの映画は、いずれも16ミリカラーで会員の皆様方で、下記映画の貸出しをご希望されます方は、当財団事務局までお問い合わせ下さい。

映画名：祇園祭・大文字・猿楽と壬生狂言・六斎念仏（以上それぞれ30分もの）
賀茂競馬・鞍馬の火祭・久多花笠踊
・風流踊やすらい花・ずいき祭
(以上それぞれ15分もの)

第28回文化財特別参観のご案内 —毘沙門堂—

今回は、京都山科にある天台宗門跡寺院の名刹毘沙門堂を訪ね、境内一円に咲く見事な桜とともに文化財の数々を鑑賞いたします。

なお、今回より申込方法が変わりますのでご注意下さい。

- ◇参観日時 昭和56年4月11日(土)
午後2時（参観時間約2時間）
- ◇対象者 財団募金協力者（会員）とその家族
- ◇申込方法 住所、氏名、年令を記入し、60円切手同封の上、封書によりお申込下さい。

- ◇申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町 京都会館内
京都市文化観光資源保護財団

◇参加費不用

※お問い合わせは財団事務局まで。なお、参加ご希望者が多い場合制限することがあります。



番匠儀式（鉋始め） を一般に公開

奈良時代に起源をもち、位階を叙せられた大工や番匠達によって宮殿や社寺の造営の際、厳粛にとり行なわれていた番匠儀式の保存につとめられている番匠保存会では、本年より京の年中行事として1月2日、太秦広隆寺（京都市右京区）において一般に公開されます。（本堂前において午前10時より）

公開されるのは鉋始めて、これは建築工事に携わる人々のその年の無事安泰を祈願するもので、平安時代から行なわれてきた現場での仕事始めや正月2日棟梁の家で行なわれた優雅な儀式をこのたび京きやりの音頭にあわせて披露されます。

編集後記

当財団の事業のよき理解者であり、財団設立以来たびたび多額の基金を寄せられておられた村上道技様（京都市伏見区）が、昨年5月にご逝去されておられたという悲しい連絡を受けました。

ここに謹んで故人のご冥福をお祈りするとともに故人が生前に当財団に寄せられた熱意を今後の財団の事業に生かすべく努力してまいりたいと存じます。

—表紙写真解説—

■宝鏡寺本堂襖絵

当寺は、京都尼五山隨一の景愛寺境内に創建され、代々皇女が出家入寺し、百々御所といわれた尼門跡で又、人形寺として有名である。

当襖絵は、本堂におさめられている秋草図で寺伝によれば、狩野探幽と伝えられる。

昭和46年度破損著しいため修理がおこなわれ当財団補助対象になった。